

豊明希望チャペル礼拝

2026/3/8

「人の子は安息日の主です」

ルカの福音書 6 : 1～11

今日の箇所は、二つのエピソードが関連して一つの話しになっています。

両方に共通するのは、「安息日」すなわち、ユダヤ教の大切にしている週に一度の休みの日ですが、その守り方の問題が扱われています。早速ですが、何が起きているかを、見ていきたいと思います。



最初のエピソードは、そもそもの、この一連の安息日の問題のきっかけとなった出来事ですが、イエス様と弟子達が、道を歩いているときに、弟子達が、道ばたにたわわに実っている麦畑の麦の実を摘んで、手で揉(も)んで、実を出して食べていた事に端を発します。

私が長野の田舎で、道ばたになっているリンゴをとって服でドロを拭いて食べたら、明らかに窃盗になります。普通の窃盗よりも重い刑になると言われて、震え上がった経験があります。ただし、イスラエルの社会では、それが許されていました。その理由は、旅人をもてなすという精神、あるいは、貧しい人が、飢えを満たすためにとるのは、聖書の愛の教えに基づく信じられていたからであります。

聖書とはそういう書であるということ、まずは、嬉しく思います。



ちなみに、これは、山梨県にある山梨県立美術館が収蔵している複数のミレーという画家の一枚です。関東にいたときに、訪れて見たことがあります。落ち穂拾いという、同じテーマで何枚か書いたうちの一枚です。これは、旧約聖書のルツ記で、ルツ一家が貧しいときに、この農園の主人のボアズが、このルツ一家のために、収穫の時に、収穫し尽くさないで、落ちた種、穂は、そのままにしておくと命じて、彼女らにそれを拾うのを許したところからヒントを得た絵です。ミレーの生きた時代、ミレーの故郷のフランスの北ノルマンディー地方では見られない習慣が、シャイイ地方という地に移住した時に、どのようなルーツか知

らないけれど、聖書と同じ精神がここにあると、感銘を受けて、描いたとされています。

私は、十戒を含めて、あの分かりにくいレビ記やなにかの律法が語られる場面でも、その教えの背景には、神の愛が必ずあると思っています。ひいては、その

神の教えが、すなわち、神から来ているという単純な事実。すなわち、人を創り、人を愛した神から来ていると言うことであります。ウソについてはならない、両親を敬えから始まって、神殿、あるいは、幕屋の配置や、器具についての律法一つ一つを見ても、一見、律法主義的と言いましょくか、杓子(しゃくし)定規と言いましょくか、何の意味があるのだらうと思う、その律法一つ一つに、神の愛が貫かれ、人が、真に神に愛された者として、その目的にふさわしく、ありていに言えば、幸せに生きるために、必要なこと、そのことに貫かれていると思うのです。

さて、この最初のエピソードですが、当時の、言わばその聖書の専門家パリサイ人の、まさに落ち穂拾いをする弟子達への批判からことは起きました。問題は、道ばたでの麦の収穫は、そういうわけで聖書の精神ですから許されていましたが、その日が、安息日、キリスト教では日曜日、ユダヤ教では、土曜日、その日だったということにありました。律法では、安息日には働いてはならないという規定があったからです。麦一粒といえども、それをとったら、それは、収穫であり仕事だと言うことであったからです。その箇所を読みます。

「6:1 ある安息日に、イエスが麦畑を歩いておられたときのことである。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。6:2 すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。「なぜあなたがたは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」6:3 イエスは彼らに答えられた。「ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、6:4 どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」6:5 そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」

イエス様は、ダビデの例をあげて、パリサイ人らの批判に反論します。そのことは、Iサムエル記21章の記事で、サウロ王から逃げて、祭司アヒメレクの家へ逃れた時のことです。ダビデは、ダビデに従って命がけで逃げてきた兵士達がお腹をすかしているのを見て、アヒメレクに、何か食べ物がないかと求めます。祭司の家ですが、律法において、祭司以外には食べることを許されていなかった、献げ物を引き上げてきたパンがありましたが、その祭司は、パンを与えます。

この例えをイエス様があげることで、二つほどのことに注目したいと思います。と言いますか、一つの言葉に注目したいと思います。それは、「**人の子は安息日の主です。**」という言葉です。

一つ目に触れたいのは、先程来触れてきたことで、律法は何のためにあるかという事です。人の子という言葉は、旧約聖書でメシア、すなわち、キリストを指すことばですが、そこをイエス様は、あえて、「人の子」という表現で表したと言う事です。特にこの「人」、人間、そして人間の子という意味です。神が、安息日を設けられたのは、神が、天地万物の創造の業を休まれたことに由来しますが、すなわち、「休む」という点に強調があります。すなわち、人を休ませるためです。

霊的にも肉体的にも、休みを与え、平安を与えるためであります。人間に、そ

ういう日が必要だと考えられたのは神さまなのです。そういう意味では、安息日は人のためにもうけられたものだという事です。人が、その日に、腹を満たし、休むことは、本来の神が安息日を設けた趣旨にかなっているということです。

二つ目に触れたいのは、人の子がキリストを指すと言うことです。ダビデの例にイエス様が触れましたが、ダビデは、神に愛された神の子であり、群の真のリーダーでした。得に、祭司アヒメレクは、ダビデが神に選ばれて、ゴリアテを倒したときから見ていて、そのゴリアテを倒した剣を家にあずかっているくらいでした。であれば、ダビデが所望すれば、パンが祭司のものであろうとなかろうと、神の子が求めたものであれば、それは、律法違反となろうが、いや、律法違反ではない、すでに神の命令に等しいと考えたと言うことです。

今、イエス様は、その真の神の子として、弟子達に、食べ物を与える事を許しているのです。であるとすれば、食べていいのです。神の子が許したとなれば、その律法をつくった神、あるいは神の子が許すことは、律法違反であるかどうかは問題ではありません。違反ではないのです。

なぜなら、安息日の主は人の子イエス・キリストだからです。

大胆に言えば、罪を犯した人間でも、すなわち、律法によれば許されてはならない罪人であっても、その人間を創った神が、神の子が、許すと言えば、許されるのは道理であります。イエス・キリストが律法の主(ぬし)であるからです。

後半部分は、前半部分が、偶発的に起きた出来事で、パリサイ人らが指摘した出来事でしたが、(後半部分は)今度は、イエス様が、あえて、みずから、律法を破ってみせた部分になります。それは、次の週か、別の安息日の出来事でした。イエス様はあえて、その日を選びました。あの麦の出来事をもう一度、思い起こさせるためでありました。

「6:6 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。6:7 律法学者たちやパリサイ人たちは、イエスが安息日に癒やしを行うかどうか、じっと見つめていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。6:8 イエスは彼らの考えを知っておられた。それで、手の萎えた人に言われた。「立って、真ん中に出なさい。」その人は起き上がり、そこに立った。6:9 イエスは彼らに言われた。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」6:10 そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。」



この次の 11 節では、「**6:11 彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合いを始めた。**」となりますが、この結果をイエス様は、当然予想していました。彼らは怒るだろうな、そして、私を殺そうとするかもしれない、しかし、それでも、どうしても、あの麦の話は、今一度強調しなければならぬと考えられたようです。シナゴクでの礼拝の時、自分を

律法違反で訴えようとしている彼らの心を悟って、彼が、いわば挑戦したのです。あなたたちが、律法違反だと言うことを、今一度やってみましょう。誰が、人の子であって、安息日の主であるかを見せてあげよう。

結論から言えば、前半の答えを今一度出すため、こう言ったと言うことです。人の子は、だれよりも、この手がなえて、まともな職にも就けず、苦勞して、それでも、神にたよって、このように礼拝に出てきている、この障害者だ、この手のなえた人だ。この人が、この礼拝、そして、今日の安息日の主人公ですと言うこと。もう一つは、律法をあえて犯しているようにみえても、その律法を犯してもいい唯一のお方、律法の主、律法を創った主である者、私が、安息日の主だと言うことです。

「6:10 そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。」

さあ、私が安息日の主です。もし神が律法違反だといって、私を罰するなら、この人は癒されていない。私は罰せられていないし、この人も、神から愛を受けている。この安息日に。誰が、安息日の主(ぬし)かよく考えよと。その主は、この人であり、そして、私、人の子、神の子であるキリスト、私であると。

この記事は、マタイの福音書とマルコの福音書の共観福音書に、共通して記録された、神学の基礎を定める、重要な出来事でした。

ただ、最後に一点、ルカだけが、何か違うことを書いている、例によって、そんな違いがやはりあるところです。

それは、ここです。「6:6 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。」

特に違うのは、ここです。「右手」です。他の福音書は、「片方の手」とだけあります。ルカは、左手ではなく、右手だと言っているのです。聖書の世界では、右手は、聖なる物を扱うときに使うとか・・・色々解釈のあるところですが、一般的に、(左利きの人も多いのですが、一般的に・・・)利き手です。強調すれば、左手ならともかく、右手がダメだったというのです。そこには、ルカなりの、人を見る目があります。彼は、そこから、人生も見ていく人です。彼は、右手が！(ビックリマーク)なえていたのだと。どういうことでしょう。



石川啄木のこんな詩があります。「働けど働けど、わが暮らし楽にならず。じっと手を見る。」社会が悪いのか、自分がなさないのか。この手に実力がないからなんだろうなあ。だから、一人前扱いされていない



私。色々解釈がありますが、実は、恵まれた、何不自由のない暮らしだった啄木ですが、一方で、両親や周りを失望させてばかりで、人の役に立たない私という思いもあったとも言われますが、私たちも、ルカが、この男のなえていた手は右手であったと言うとき、想像力を巡らさ

なければなりません。この手で働き、この手で稼ぐ、その手が不自由。彼にとって、この安息日に至る 6 日間は、他の人と比べて、どれほど苦痛で、つらいものだったか、その彼が、そのつらい 6 日間を終えて、たよれるのは、ただ、神しかない、神のみが私の居所とばかり、這うようにして、礼拝にたどり着いた。彼は、これまでの人生でいったい何度、礼拝で、一週間を省(かえり)みながら、その右手を見つめただろうか。そのたびに、主よなぜなのですか、なぜ、この手なのですか、なぜこんな人生なのですかと祈り続けた、この会堂での、それは出来事だったのだとルカは言いたいのかも知れません。

「私こそ人の子キリストである。人を創り、また安息日の主である。その私が望む。誰もそれを否定できない。邪魔できない。治れ！癒されよ！」そして、癒された、それが、この出来事だとルカは付け加えるのだと思います。

さて、安息日の主の出来事を見てきました。

今日も、この日曜日、あなたの為だと用意して下さった主日に、本日も礼拝が出来たことを心から感謝したいと思います。そして、安息日から始まるこの週が、この主への感謝と主への献身と証しの歩みとなるように祈りつつ出ていきたいと思っています。